

「変革と挑戦 そして伝統へ—学力向上と地域連携を核に—」

～学校経営（成育小学校）の実践から～

大阪市立成育小学校 豊田 雅弘

I はじめに

私は、学校教育の意義は学力向上にあると考える。授業が勝負。授業によって子どもがどう変わるか。変わった瞬間は、教師の醍醐味であり、この上ない喜びである。しかし、一言で学力向上と言っても豊富な知識を身につけているだけでは急激に変化している社会に通用しない。これからの社会を担う人材育成に必要不可欠なのが「生きる力」。さらには「生き抜く力」を習得させなくてはならない。それこそが学校教育における学力であると考え。

情報が社会のいたるところにあふれ、簡単に手に入れることができる状況の中で子どもたちは生活している。教師自身もこのような社会に慣れてしまい、汗を流しての教材研究や教材開発はもちろんのこと、手作り資料の作成もしなくなってきた。つまり、子どもの実態から乖離した授業になってきているのではないかという危機感を私は抱いている。

子どもにとって、楽しく学ぶことが一番の楽しみであり、主体的に学ぶことが真の学力向上につながるものと考え。学校に来て学ぶ意義はそこにある。これは、教諭時代から校長になった今でも変わらない考え方である。そんな学校教育を実現することが私の学校経営の理念であるが、それを実現するためには、保護者や地域の協力つまり学社連携、さらには学社融合が必要である。

学校経営を担う立場の現在、それをどう具現化し、組織として取り組んでいくべきか指標を示さなければならない。いかにそれを分かりやすく教職員に説明し、決して一人でも傍観者にならず、全員がベクトルを合わせて実践できるようにすることが、校長のリーダーシップであると考え。私なりの学

校経営の理念を以下、述べていく。

II 円滑な運営ができる学校づくりの視点

学校教育で成果を上げるために、学校組織として、教職員としての立場でどのような取り組みができるのか、効果的なものにしていくのかの観点で、校長のリーダーシップを発揮すべき重点を掲げた。学力向上につなげていくための必要条件として取り組んでいこうと考えたのは以下の5点である。

- (1) キーワードで目標を明確化する
- (2) 学校教育目標や運営に関する計画の共有を図る
- (3) 子どもとの信頼関係を築くことの重要性を常に確認する
- (4) 楽しい授業づくりを推進する（授業力の向上）
- (5) 学校・地域・保護者による「子育てトライアングル」を確立する

III 学校運営の取り組みの実践

(1) キーワードで目標を明確化する

目標を掲げないと成果は見込めない。毎年キーワードを教職員に提示し、取り組みを進めるように心がけている。今年は「変革と挑戦 そして伝統へ」のスローガンのもと、「笑顔あふれる成育小学校／一人一人が輝く成育小学校／活みなぎる成育小学校／地域と歩む成育小学校」を目標に掲げた。

これまで踏襲してきた取り組みには意味があるものも多い。しかし、すべてが今、通用するものではない。このような危機感を強く抱いた。一つ一つのことを検討しないで何でもこれまで通りで進めていくことはさほど労力がかからない。再考した結果

が同じ形で終わっても大きな意味がある。それは、目まぐるしく変化する社会の中にあって、教育界においても「大阪市教育振興基本計画」が改革の第2ステージと位置づけられて改訂され、文科省からは「次期学習指導要領」が公示されるなど大きく舵が切られた今、学校はどのように動いていくことが求められているのか。どうすることがベストなのか、ベストと言えないまでもよりベターなのかを考え、マイナーチェンジであっても変わっていかなければならないことが山積している。それらに組み込む具体的なビジョンがないと学校の活性化は望めない。変化することは、教職員も保護者、地域も勇気がいることである。時代から取り残されないためにも、社会を見る目を働かせながら、変革しようとするチャレンジ精神が不可欠である。年月だけを経ても伝統にはならない。常に、社会や児童の状況やニーズに合った学校づくりを考え、取り組みを積み重ねていくことが、伝統を築くことであると考え。

ちなみに、校務分掌の枠組みを運営に関する計画に従った形に再構成した。その結果、責任が明確になり、機能的に働きだした。それぞれの部署が、運営に関する計画の指標に沿ってアンケートなどの事態調査を行うようになり、成果と課題が明確になった。

(2) 学校教育目標や運営に関する計画の共有化を図る

まず、何のための目標か計画なのかを考えるところからスタートしなければならない。子どもたちが安心して、楽しい学校生活を送り、教育効果を上げるということは言うまでもない。そのために、学校として教職員として具体的にいつするのか、何をするのか、何ができるのか一人一人が自分の問題としてとらえ、組織の一員である自

覚のもと学校運営に参画するという意識を持たせなければ共有化は図れない。

子どもの学習指導でも言われるように、まず自分の考えを持つことがスタートであり前提である。それでこそ、問題意識がめばえ他者と考えをすり合わせ主体的・対話的で深い学びにつながる。そして、自分の問題として深い学びにつなげていくのであるが、教職員についても同様のことが言える。まさにベクトルを同じ方向に合わせた教職員にとっての深い学び＝取り組みがそこにあるといえる。字面だけでは表面的な理解で終わり、共通理解が図れたとは言えない。共通理解を図るために、年度当初の忙しい中であるが、時間を割いて丁寧な説目を行った。

(3) 子どもとの信頼関係を築くことの重要性を常に確認する

ア 学級づくりの基盤を確立させる

学級経営、児童理解がすべてにおいて、基本であることは言うまでもない。これが築けていなかったり曖昧であったりすると教育効果は望めない。3・7・30の法則を大切に1年のスタートを切ることが心がかかるよう、全教職員に働きかける。3・7・30とは、生活指導などでよく言われることであるが、最初の3日間で信頼関係を築く。次に7日間で基本的なルール作りを行う。そして、30日で修正を加えながら集団作りを確立する。

しかしながら、学級目標などが掲示されていても、形骸化していることが多い。

そうならないために、常に確認作業が必要となる。30日が経過しても、安心せずに振り返りを行い、意識させるようにする。

校長としては、午前中に1回、午後に1回各教室を回り、学級の雰囲気を感じ取るようにしている。また、同時に

短時間ではあるが授業観察などを行い、目標に沿った授業ができているのか、学習規律が保たれているのかを点検したり、学級目標を意識しながら子どもたちの活動が行われているのかを敏感にキャッチしたりしながら教職員にはアドバイスを送るようにしている。

イ 校長の思いや考えを子どもにも背中 で感じさせる

本校では週1回、月曜に全校朝会を行っている。この10分間は校長にとって全校児童に行う授業だと考えている。そこで、話の内容には学校として取り組んでいきたいことを随所に盛り込んでいつている。話を聴いての感想や意見などを子どもたちから募集し、校長室前に設置した箱に入れるようにしている。そのことで、「聴く」→「考える」→「表現する」つまり言語活動の充実をねらいとした取り組みを行っている。そして、子どもたちが校長室前の応募箱に足を運ぶことによって、校長室を少しでも身近な存在に感じてもらいたい、距離を縮めたいという思いもそこにはあるからである。あわせて校長室前の掲示板には、話のキーワードを掲示している。子どもたちが感想を書く際、話の内容確認になるだけでなく内容の定着につなげることをねらっている。

子どもたちの発達段階には当然違いがあるので、各学級でも話の内容確認や具現化が必要になるが、それを行うのは各担任の役割である。そのことは、各担任も私の思いや考えを再確認することにつながるとともに、子どもへの指導の徹底にもなっている。

また、子どもたちが書いた感想については、返事を書いて返すようにし、子どもとのコミュニケーションを図っている。

子どもたちの信頼関係を築く方策と

して取り組んでいるが、廊下や校外などで出会った際にも話しかけたり挨拶を交わしたりできる子どもが非常に多くなったと感じている。

(4) 楽しく学ぶ授業づくりを推進する

(授業力の向上)

ア 対外的に学ぶ機会を増やす

教職員の指導力、授業力を向上させていくには、校内だけではなかなか身につかないものである。対外的に学ぶ機会を増やすことが不可欠である。そして、研修してきた内容を校内に持ち込み、伝達講習的なことも積極的に行う。長時間でなくても、職員会議の続きや職員朝会などの短時間を利用するようにした。

イ 「がんばる先生支援事業」を生かす

本年度は本校が小教研社会部の部長校となり、総合研究発表会分科会社会部の一年次発表の会場を担うこととなった。

研究の主体は社会部であるが、授業公開を伴う研究発表であるため当然本校教員が授業公開の役割を背負う。昨年度から校内の研究教科を社会科・生活科としたが、「少しでも校長（私）が本校での在職中に多くを学びたい」という教職員の強い気持ちがそうさせた。さらに、本校の研究についても、がんばる先生支援事業の指定を受けることになった。この発表については校内の研究成果を公表するので、教職員がベクトルを合わせて研究に取り組む姿勢が一層見られるようになった。

ウ 身近な人材や教材を活用した授業づくりをする

学習は子どもにとって身近なものでなければならぬ。まして、本校が重点を置いて取り組んでいる社会科においては特に大きなウェイトを占める。地域にある素材を教材化することや地域の人材を

発掘していくことが欠かせない。そのためには、まず教師（実際に授業をする教職員）が地域を知ることから始めなければならない。研究部長をリーダーとして研究推進委員会が計画し、校区（地域）を教材開発の視点でフィールドワークとして職員研修に位置づけて実施した。これは、何気なく歩いているのではなく視点を定めて校区をよく見ることで、教材開発に役立った。そのことを通して、子どもたちにとって身近な教材による学習ができ、学習効果が上がったことは当然である。そして、教職員と地域の方々とが直接会話を交わすことができ、知り合いになれたことは大きな成果である。

昨年度は本校の卒業生である関西学院大学アメリカンフットボール部監督の鳥内秀晃氏を教育講演会に講師として招き、人間力の育成についてご講演いただいた。今年度には、本校卒業生を含む部員10余人を招き、全校児童にフラッグフットボールを指導してもらうとともに、各教室に分かれ給食をともにする、ふれあいの時間をもつこともできた。

エ 研修のあり方を工夫する

授業づくりにおいて大事なのが、教師の指導力である。もちろん若手教員の育成が急務であり、本校でも経験10年未満の教員で「サラダの会」を組織し、メンターを中心にニーズに合った自主研修を月1回、月中行事にも位置づけ実施している。

しかし、それだけでは全体の底上げはできない。学級経営が基盤になることは言うまでもないが、次期学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」がキーワードとなっている。いかに子どもに主体的な学びをさせるのか、対話的な学びをさせるのか、学びを深めていくのかが大きな命題となっている。校長自らも必

要に応じて授業を行い、授業で大切にすべきことを示すようにしている。それぞれが勝手な解釈をされていては組織として研究成果は見込めない。基礎研修が必要である。また文献研究だけでは机上の論で終わったり、理解不十分だったりするそこで、研究授業とは別に提示授業を設定し、それをもとに切り込んでいくことにより、教職員一人一人が共通したイメージを持つことができた。それは研修研究の共通理解そして土台づくりができたことで大きな意味があった。そのことから、本校では「学びのサークル」と命名した学習の流れを導き出した。問いの連続性から単元を通して学びが深まっていくことを実感でき、日頃からの授業の流れや何を大切に授業を行っていくのかもある程度明確になった。

(5) 学校・保護者・地域との「子育てトライアングル」を確立する

ア 学校から発信していく

学校の取り組みをホームページにアップして発信していくことは、多くの学校で行われている。本校でもできるだけ更新回数を増やすようにしている。説明書きも端的にしかも丁寧に取り組み内容がよく分かるように心がけている。日々のアクセス数は100を超えることもよくある。(過去最高1日のアクセス数は469) 学校選択制の学校説明会でもプラスの感想が多く寄せられ、結果校区外の隣接地域からの入学者は1割5分に上っている。

上に述べた「がんばる先生支援事業」(校内研究)の発表については、全市の教職員を対象に実施するが、保護者や地域の方々にも公開し研究成果を披露する。そのことで行事だけではなく、授業や研究の中身についても直に発信できる絶好

の機会ととらえたからである。

イ 地域と学校が協働する

「大阪市教育振興基本計画」にも示されるように、学社連携がだいじであるが、さらには学社融合、学社協働まで進めていき、信頼関係を築いていくようにしていこうという思いがある。老人会を中心とした方々が見守り活動にご協力していただいているのはよくあるが、それだけではない。大きなものとしては、地域合同防災訓練である。何度も学校とも協議を重ね、3年前から学校とともに日曜日に大々的に実施されている。

ウ 子育てトライアングルとは

子どもの健全育成の視点から本校では昨年度から提唱しているもので、学校・保護者（PTA）・地域の三者が力を合わせていきたいと思いますという趣旨である。まさに本年度示された「大阪市教育振興基

いつの時代でも、基本は「あいさつ」がしっかり、きちんとできる。しっかりと声を出して返事・発言（書き表すこともある）できることだと思います。また、協働意識を高めなければ集団や組織は機能しません。それが私の座右の銘である「協調運転」です。

組織は、大小の歯車がかみ合って回っています。大きくゆっくり回転するもの、小さく速く回転するもの。一つでも歯が欠けたり、軸が曲がったり折れたりするとスムーズに回りません。学校組織もPTA（保護者）組織も歯車の集合体です。その集合体の両者ががっちり絡み合わないとい前に進めません。

それぞれの組織の1つ1つの歯車には役割があります。誰もが異なる（個性といわれるもの）大きさや位置（場所）、役割を担って、回転している歯車なのです。

その両方と接点をもち、支えているレールの役割が地域であると言えます。レール（線路）が急カーブで脱線したり、急勾配の坂で列車が動かなくなったりしないようにささえてくださっています。

歯車がうまく動いて走っている列車に乗っている乗客が子どもです。乗客同士がけんかを始めたら、列車は止まるしかありません。いざこざが治まるようにするのが運転士や車掌（大人）です。歯車の回転数を調整するなどして、列車の揺れを抑え、快適な車内づくりに努めます。そして、乗客の子どもたちが、美しい車窓（学習環境）に心癒されたら、楽しい旅（学習成果・良好な人間関係）ができます。

これこそが、まさに協調運転です。協調運転ができれば、成育鉄道は快適で安心安全運行となります。そんな成育鉄道を、子育てトライアングルで創りあげていきたいと思います。

（H28.6 発行の PTA 新聞に記載の記事）

本計画」の最重要目標に掲げられた柱の一つ、「子どもが安心して成長できる安全な社会（学校園・家庭・地域）の実現」と一致するものである。

学校協議会をはじめPTAの総会や学校新聞などでも発信してきたが、言葉や平面の図では説明がつきにくいので、立体模型を手づくりし、学習参観や運動会等の学校行事での受付場所で説明をそえて披露したり、学校選択制の説明会でも説明したりしている。



子育てトライアングル

子どもの健全育成のためには、学校・保護者・地域の連携・協力が不可欠で、それが子育てトライアングルです。

保護者の皆さんにはPTA活動への参加で、保護者同士のつながりを。それが子どもにも還ります。

それから、地域行事への参加勧奨を。地域の一員であることの自覚が子どもには芽生えます。また、見守り活動をしていただいている地域の方へ感謝の気持ちが大切です。子どもの安全に関わる見守りをボランティアでしていただいているのです。

激変の社会を生きていくには変化に対応する柔軟性が必要です。しかし、変えてはならない「不易」はあります。それらをうまく融合させながら、より良いように変革していくことを積み重ねていくことこそが伝統です。子どもたちのために、学校もPTA（保護者）も手を携えて成育小学校の伝統を築いていけたらと思っています。

（模型の説明）

そのためには、互いが近い存在となり、積極的にコミュニケーションを図っていく必要がある。互いにどこまで、どのような協力をし合えるのかをともに考え、ベクトルを合わせていくことで、より一層大きな成果が得られるのである。

エ 校長自らが積極的に地域とつながる

地域行事が活発に行われている。子ども会主催の「町会対抗ミニ運動会」、「球技大会」、地域活動協議会主催の「文化祭」「ふるさと祭り（盆踊り）」、青少年指導委員会主催の「校庭キャンプ」、老人会主催の「ディスコン大会」、防犯委員会主催の「ラジオ体操」、PTA主催の「親子プール」など、毎年子どもたちが楽しんで活動できる場として実施されている。

休日ではあるが、その中へ学校としても積極的に参加していくようにしている。ミニ運動会では、教職員チームもリレーに参加。校長も若い教職員に混じって走った。文化祭では、学校にも出演依頼があり、校長と教頭がコンビを組んで漫才を披露した。学校として、昨年まではなかった参加の仕方である。また、それぞれの行事にはできるだけ多くの教職員も顔を出している。そのことは、参加している子どもたちだけでなく、保護者や地域の方々に学校が身近な存在として感じとっていただけるいい機会となったことは言うまでもない。

このように、挑戦（チャレンジ）していく前向きな姿勢を地域にも示せたことは非常に有意義であった。

IV おわりに（成果と今後に向けての決意）

以上、述べてきたような取り組みを積み重ねてきた結果、次のような成果が見られた。

- 教職員の意識の一体感が強くなり、教職員同士のつながりが強くなった。顕著な例として、学年の結束はもちろん、学年を超えて授業づくりなどの相談や協力している姿が多くみられるようになった。
- 地域や保護者の大きな信頼を得たことで、学校との協力姿勢が強まり、連携した行事の取り組みなど共に歩んでいると

実感することができた。

- 校内外のいろいろな場所で地域の方々にお会いしても、すべての教職員が挨拶するようになった。そのことは、学校と地域が双方向での関係が築かれてきているということであり、管理職だけが地域とつながりを持っているのではなく、地域に根ざした学校という印象を持てるようになったと言える。

今後も学力向上を学校運営の中心に据え、学校組織として「主体的・対話的で深い学び」をめざして取り組みを続けていく。そしてそれを支える数々の方策を一つ一つ大切にして取り組みを積み重ねていくことが、子どもたちにとって質の高い教育内容の実践につながるものと確信する。そして、地域や保護者の理解と協力を得ながら「変革と挑戦 そして伝統へ」を信念として学校運営に邁進していく覚悟である。それが、私に課せられた使命であると認識しているからである。

変革と挑戦そして伝統へ

(change & challenge and tradition)

今、日本の教育界は大きな変革期を迎えています。特別の教科「道徳科」が来年度から実施され、英語活動もモジュール（週当たり15分を3回で1単位時間に換算）として本校では今年度から全学年スタートしました。次期学習指導要領も告示され、平成32年度からの本格実施をめざしています。

本校では講堂（体育館）の建て替え工事が正式に決まり、今秋着工となります。完成は再来年1月末の予定ですので、1年教か月かかります。JR新駅開業とはほぼ同時期になるのではないのでしょうか。新しいものができるのは嬉しいのですが、それまでの間いろいろ不便なことが多く出てきます。その点についてご了承いただきたいと思います。

器ばかりができて、中身も充実しないと意味がありません。本校では昨年度から研究教科を社会科とし、大阪市・府はもちろん全国にも発信していく研究部の拠点校となっています。その発表が来年2月に予定され、文科省の視学官に講演をお願いしています。加えて、本校としても市教委の研究指定を受けることになり、時期は未定ですが社会科・生活科の授業を伴う発表の場をいただくことになりました。全市の教員研修を主としますが、保護者の方々にもその一端を見ていただく機会を設けようと計画中です。

学習の土台となるのがやはり「あいさつ」がきちんとでき、しっかりと声を出して返事・発言（書き表すこともある）できることだと思います。次期学習指導要領で「主体的・対話的で深い学び」が提唱されていますが、本校の各学級ではそれに向けて日々取り組んでいるところです。つまり、「学びのサークル」を確立する必要があります。

それらのことを常に意識することが大事なので、玄関付近や校長室前の整備をしたところです。昨年提唱しました「子育てトライアングル」を充実することで成育小学校の新たな伝統を創りあげていきたいと思っています。みんなの手によって、実現しましょう!!

(H29.6発行のPTA新聞に記載の記事)